

くもんの 高校入試スタートドリル

こわくない
古文・漢文

別冊

解答と解説

正答（または模範解答例）のあとの〔 〕内は別解です。

19	気が弱すぎた笛の名人 1 イ 2 ア 3 ウ	P.43
18	ねずみにえさを与えた優しい男 1 (1)ウ (2)ウ 2 食事・ねずみ狩り	P.41
17	芸は国王を助ける 1 楚王・鈴 2 ア 3 敵ども・楚王	P.39
16	盗まれた小袖を泥棒に返した尼 1 (1)盗人(強盗・泥棒)・小袖 (2)ア 2 イ	P.37
15	良いことをまねるのは良いことだ 1 孝行 2 ウ 3 イ	P.35
14	孝行心がもたらした不思議な力 1 ア 2 命・父 3 ウ	P.33
13	蜂飼の大臣の手から 1 無益のこと 2 ア 3 ア 4 枇杷(びわ)・蜂	P.31

26	秋と冬のおわれなるもの 1 ウ 2 ア 3 イ	P.57
25	用もないのに人を訪ねるべからず 1 ウ 2 イ 3 ウ	P.55
24	「かさね」という名の女の子 1 ウ 2 ア 3 ア	P.53
23	歌が書かれた母上の手紙 1 ウ 2 (1)ア (2)子(男) 3 母	P.51
22	ゆず泥棒のみことなチームワーク 1 尖・足手 2 高い・目(眼) 3 (1)ア (2)ア	P.49
21	名人はこうありたいもの 1 イ 2 イ 3 イ・エ(順不同)	P.47
20	「犬」の字がめでたいわけ 1 イ 2 天子・太子(順不同) 3 イ	P.45

1	まめけな中間の言い損ない 1 ウ 2 ア 3 イ	P.7
2	今なら「寒い」とは言えず 1 ウ 2 ねずみ・足 3 イ	P.9
3	池に落とした酒瓶は 1 浮草 2 飲んで 3 イ 4 ウ	P.11
4	暴れ馬とわかったとたんに 1 イ 2 イ 3 イ 4 ウ	P.13
5	「そこのべ」って魚の名前んだけど 1 イ 2 イ 3 イ	P.15
6	消えてしまった目印 1 目印・宿 2 (1)ア (2)つば・鳥	P.17

7	けちな男のばけたしわざ 1 イ 2 ウ 3 イ	P.19
8	猫の首に鈴を付けるのはだれ? 1 イ 2 首・鈴 3 ウ	P.21
9	人のおだてに乗ってはいけない 1 ア 2 鼻声 3 ア	P.23
10	お腹がパンクした蛙 1 ウ 2 かぶら 3 イ 4 イ	P.25
11	蟻の恩返し 1 ウ 2 鳩 3 (1)イ (2)ア	P.27
12	僧はいったい何歳なのか? 1 (1)十四 (2)七十・六十 2 イ	P.29

実戦編 答えと解説

27 若い人に見習わせたこと

- 1 イ
2 (1)相模守時頼 (2)破れたる所ばかりを修理して用ゐる事

P.59

28 うれしいものは

- 1 物語・心配・ほめられる〔認められる〕
2 ア 3 ウ

P.61

29 メールもいいけど、やっぱり「文」よ!

- 1 ア 2 いみじき(と) 3 イ

P.63

30 孔子が馬を「牛」と言つたわけ

- 1 イ 2 牛・牛 3 一・聞・十・知

P.65

31 親孝行するのはかゆいもの

- 1 イ 2 帷帳・敢・擇

P.67

32 道ばたのすももが苦いわけ

- 1 二・一 2 ウ 3 ウ

P.69

33 盾と矛を売る商人の口上

- 1 エ 2 矛・盾
3 ④・①・②・③・⑤・⑥

P.71

34 雨上がりの春の朝

- 1 ①イ ②エ 2 三 3 有…無情…力

P.73

35 友を送る夜

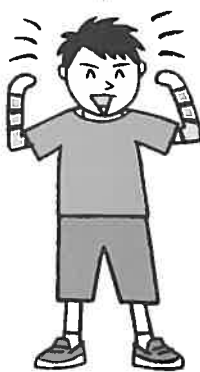
- 1 (1)騎…イ 主人…ア (2)ウ 2 ア 3 ウ

P.75

わからない時や、間違えた時は、もう一度「入門編」のお話をじっくり読んでみてね。



「入門編」を全部読んだら、なんだか古文・漢文がこわくなくなってきたよ!



ので誤り。したがってエが正解。

【現代語訳】

異常なへうらいに何かにつけて祝つたの好きな亭主がいて、与三郎という中間に、大晦日の晩言ひ教えたことには、「今夜はいつもより早く家に帰って休み、明日は早く起きて来て門をたたけ。内から(私)亭主が」だれですか?と尋ねる時、『福の神でございませう』と答へよ。すべし、戸を開けて(中に)呼び入れよう」と、丁寧に言い聞かせたあと、(元日の朝)亭主は氣にかけて、鶏の鳴くのと同時に起き、門の向うに待っていた。計画通り(与三郎が)戸をたたき、「だれですか、だれですか」と問う。「はい、与三郎です」と答へる。(亭主は)非常に不機嫌ではあったが門を開けてから、そのあたりに明かりをつけて若水を汲み、雑煮を吸ったが、亭主の顔は不機嫌そうて、何も言わない。中間は、不審に思い、よくよく考えていて、タベ(亭主が)教えた福の神のことを忘れていたのを、やつと酒を飲むころに思い出し、驚いて、膳をあげ、座敷を立つ時に、「さて、福の神でございませう。(これで)おいとま申し上げます」と言った。

解答

- (1) いいおしえける
(2) ①亭主 ②ウ
(3) A 福の神にて候 B (いや、)与三郎
(4) エ

1 まぬけな中間の言い損ない

P.78・79

(1) ↓ P.79出る問 ポイントを見よう!

(2) ① 線①を含む会話文は、「亭主」が「中間」に言ったものであることから考える。「……と問ふ時、……と答へよ」と頼んでいるので、問うのは「亭主」である。

②直前に「福の神にて候」と答へよ」とあることと、この「亭主」が「けしからず物毎に祝ふ亭主」(「異常なくらい何かにつけて祝ふことの好きな亭主」)であることから考える。

(3) 大晦日の晩に亭主が中間に言い聞かせたことと、「元日の朝、実際に中間が言ったこととの違いに着目する。中間が、「福の神にて候」と答へよ」と言われていたのに、「いや、与三郎」と名前を答えてしまったので、亭主の機嫌が悪くなったのである。

(4) 中間が「福の神で御座ある。おいとま申し参らする」と言つて出て行ったことから考える。つまり、この家から「福の神」が出て行ってしまうことになるのである。ア「連れていく」が誤り。イ・ウもてなしについてどう思ったかは書かれていない。

出る問 類題

解答

- (1) ①さかえたる ②にわかに
(2) わざわい (3) なおざり (4) くう

語中・語尾のハ行をワ行に直す。

- (1) ①栄へたる↓さかえたる ②にはかに↓にわかに
(2) わざはひ↓わざわい
(3) なほざり↓なおざり
(4) 喰ふ↓くう

【現代語訳】

- (1) 昨日まで茂っていた木が、突然枯れた。
- (2) 私の稲は最近植えたので、嵐の害にもあいませんでした。
- (3) 初心者は、二本の矢を持つてはならない。二本目の矢を頼みにして、最初の矢をいかにけんにする気持ちがある（からである）。
- (4) そのあとは七草がゆにして食べたが、あまりおいしいものではないと思いがち、……。

2

今やじ「寒い」とは言えず

P. 80・81

解答

- (1) さよう
- (2) イ・ウ（順不同）
- (3) 夜着
- (4) ①例「ねずみが、私の着ている物を踏んだら不潔だから。」
- ②例「ひどく寒いから。」

↓ P. 81 出る問 ポイントを見よう！

- (1) 登場人物は「奉公人のはてと覚しき」者と、「亭（亭主）」。
- (2) あらすじにそってどちらの言動かを順に考えてみよう。ア「亭ほめて、……と言ふ」とあるので、「亭」の言動。「亭」の言葉に答えて「いや、……無用」と言つてそのまま「寝ねける」のは「奉公人のはてと覚しき」者。亭主、亭主……洗はせたか」と「問ふ」のは「奉公人のはてと覚しき」者。これに答えて「いや、……」と「答ふ」のは「亭」。
- (3) 亭主の「夜着を参らせんや」（＝ふとんをお持ちしましょうか）に答えて、「（野や山での戦いをし慣れていて）少々寒きことをば知らず（＝少々のことなら寒いとは感じない）。無用（＝

【現代語訳】

- (1) 春は明け方（がすばらしい）。だんだん白んていく山がわが、少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいている（のはすばらしい）。
- (2) することがなく手持ちぶさたなのにまかせて、ただ一日中、硯に向かつて、心の中に次々と浮かぶたわいもないことを、とじとめもなく書き記していると、わけがわからず狂おしい気分になる。

3

池に落とした酒瓶は

P. 82

解答

- (1) いいける
- (2) ウ
- (3) A 智運房（といふ僧）
- B 例「落としたところをすぐに汲めば大丈夫だ」
- C かへすがへす不思議なり

- (2) 一文目に「智運房といふ僧ありけり」と話題の中心人物を示したあと、二文目のア・イの主語が省略されているので、ア・イは「智運房」が主語だと考えられる。智運房が持つて帰った酒を飲んで「一向水にてあるは」（＝まったく水ではないか）と問うたウは一緒に酒盛りをしていた「人々」。その問いに答えて「すぐに汲みましたのに」と言っているエは、酒を買いに行つた「智運房」。したがって、ウが正解。
- (3) A「猿沢の池に瓶子を落とした」のは「智運房」。B 智運房がどう考えて「池の水を持つてきてしまった」のか、その時のことを説明した智運房の言葉に着目してとらえる。智運房は「やがてそこを急ぎ汲みて、瓶子に入れて候ひつるを」（＝すぐにそこを急いで汲んで、瓶子に入れましたのに）と言っていることから、

- (4) 「着のまま寝ねけるが、夜ふくるに従ひ、ひたもの寒し」に注目。亭主のほめ言葉に乗せられて夜着を断つて寝たものの、夜がふけるにしたがつてひどく寒くなったのである。とはいえ、「少々寒きことをば知らず」と言つてしまった手前、今さら「寒いから」と言つて夜着を借りるわけにもいかず、そこで別の理由を考え、代わりに「むしろ」を借りることにしたのである。「ねずみが私の着物を踏んだら不潔であろうから」というのがその言い訳としての理由。本当は「ひどく寒いので」、むしろで寒さをしのごうとしたのである。

【現代語訳】

以前、武家の家臣であつたと思われる者が宿を借り、いろいろなことを語り尽くした。亭主がほめて、「なるほど、ふつうの人には見えません。もうお休みになってください。ふとんをお持ちしましょうか。」と言つた。武家の家臣であつたと思われる者は「いや、たぐさんの野や山での戦いをし慣れていて、少々のことなら寒いとは感じない。いらない。」と言つて、着のみのまま寝たが、夜がふけるにしたがつて、ひどく寒い。そこで、「亭主、亭主。この家のねずみには、足を洗わせたか。」と尋ねる。「いえそのよつなことはありません。」と（亭主が）答える。「それならば、むしろを二枚（私に）掛けてください。ねずみが、私の着ている物を踏んだら、不潔であろうから。」と言つた。

出る問 類題

解答 (1) ようやう (2) あやしゅう

- (1) 「やうやう」＝「yauyau」なので、「yôyô」＝「ようよう」となる。
- (2) 「あやしゅう」＝「ayashii」なので、「iu」は「yu」となり、「ayashii」＝「あやしゅう」となる。

すぐに汲めば池に流れ出た酒をそのまますくえろと考えたとわかる。C 作者の感想は、文章の最後の一文に述べられている。

【現代語訳】

興福寺に智運房といふ僧がいた。

ある時、酒盛りをしたが、夜がふけてから、空になった瓶子に酒を入れようとして瓶子を持つて、酒屋へ行き、まもなく帰る。人々は盛り上がり、瓶子の酒を飲み込んで見ると、浮草がある。試しに飲んでみると水である。「これはどうしたのだ。まったく水ではないか」と（智運房に）尋ねると、「まさかそんなことはないでしょう。すぐに汲みましたのに」と言つた。「これはどういふことだ」と人々が聞くと、（智運房は）「夕方から、まさに雨（が降り）、道は滑りました。月はかすんでいました。猿沢の池のほとりへ滑つて、瓶子を池に落としてしまいました。すぐに（＝落としたところ）を急いで汲んで、瓶子に入れましたのに」と言つた。本当におかしな話である。

4

暴れ馬とわかつたとたんに

P. 83

解答

- (1) おこなわせたまいける
- (2) ウ
- (3) イ
- (4) エ

- (1) 「おこなはせたまいける」と、「ハ行」が二か所あることに注意。
- (2) 「ある房官」が、「知りたる人」（＝知り合い）に「あがり馬」と言われて「臆して」（＝おじけづいて）いることから考える。
- (3) 線②は、馬に乗つた房官を見た「知りたる人」の言葉。「さしものあがり馬の名物」とは、「これはど気性が荒い馬として有名な馬」といった意味。その馬「六の茸毛」に「いかに……」

かく乗りましたまへるぞ」(「どうして……このように(平気で)お乗りになっているのですか」と言っている。ここから、有名なあがり馬に平気で乗っている房官を見た「知りたる人」の驚きの気持ちがわかる。

- (4) 平気で六の輩毛に乗っていた房官が、突然おしげづいて落馬してしまったのがこの話のおもしろさ。ア「知り合いにほめられ」、イ「恥ずかしがって」、ウ「その馬の本当の価値」「軽べつされてしまった」が主な誤り。

【現代語訳】

そう遠くない昔、「六の輩毛」という(名の)気性の荒い馬がいた。どの住職の時であつたか、重要なお祈りを行いなさつた時、贈り物として進呈された馬を、ある房官にお与えになった。(房官は)気性の荒い馬とも知らないで乗り歩いてたが、ある時、京に出た時に、知っている人に途中で出会つて、この知り合いが(この馬を見て、)どうしてこれほど気性の荒い馬として有名な、六の輩毛にこのように(平気で)お乗りになっているのですか」と言つたので、(房官は)おしげづいて手綱を強く引いたところ、たちまち(馬は)前足を上げてはね上がり(房官を)投げ出したので、まさかさまに落ちて、頭をさんさんぶつけてけがをしてしまった。おもしろかつたことですよ。

5

「そいふべ」って魚の名前なんだけど

P. 84

解答

- (1) まわりて
(2) ① A そいふべといふ魚 B そいふべの汁
② 例「そいふべ」を魚ではなく客の名である(18字)
(2) ① A 「宇喜田直家から小早川隆景のもとに」「送られてきた」物である。古文中に「かの魚を送らるる」とあるので、「か

- (4) 例門柱に付けたつばが消えてしまったから。

・例屋根にいた鳥がいなくなりましたから。

(順不同)

- (1) 線①の直前で、主人は「京は家のつくり同じ様にて、見知りにくい」というように、「宿屋を覚えておけ」と命じる根拠を挙げている。この部分を現代語に直し、文末を「〜から。」として答える。見知りにくい」は、「京は家のつくりが同じようなので」に続くことから、「見分けにくい」などと訳すとよい。

- (2) 「心得申したる」は「わかりました」ということ。あとの「即座にうけがひ」(「すぐに承知して」)から、深く考えず軽く引き受けたことがわかる。

- (3) 前にある「案のごとく(「予想通り」)忘れて」に着目する。主人は宿を出るとき、宿の場所がわからなくなりそうだと思つて下人に注意したのだが、その予想通りになってしまったという流れなので、イ「やはりそうだった」が正解。

- (4) 「下人」が付けた二つの目印がどのようなものだったかを確かむ。どちらもすぐに消えてしまったもので、宿の場所がわからなくなつてしまい、あちこち尋ね歩いたのである。

【現代語訳】

田舎から初めて京に出てきた人が、宿から見物に出るということで、伴つて下人(「召使い」)を呼んで、京は家のつくり方が同じよつたので、見分けがつきにくいぞ。何でもいいて(何かを)目印にして、(宿屋を)しっかり覚えておけ。」と言いつける。(下人は)「わかりました。」とすぐに承知して、さて方々を見物して帰り、(主人が)「足を洗う準備をしなさい。」と言つて(下人を)一人て先にやると、予想通り(宿の場所を)忘

の魚」が指すものを探すと、一行目に「備前の国岡山に、そこ

にべといふ魚あり」とある。ここから字数に合わせて書き抜く。B 家老たちが登城した時、出てきたものを探す。古文中に「出てたる膳部を見れば、そこにべの汁なり」とある。

- ② 従者は、何を何と誤解したのか。隆景の「そこにべが来た」という言葉を受け、「かせ者」(「従者」)は家老たちに「そこにべ殿お越しにて候ふ」(「そこにべ殿がお越しでございます」と伝えて回っている。つまり、従者は「そこにべ」を魚の名前ではなく人の名前だと誤解したのである。「二十字以内」で、何を何と誤解したのかがわかるように書く。

【現代語訳】

備前の国岡山に、そこにべといふ魚がいた。他国にはめつたにないものである。領主の宇喜田直家から、芸州の小早川隆景が備前中津の城におられた時、その魚を送られた。隆景は、侍におつしやつて、夜中に備前からそこにべが来たので、家老の者たちに今朝もてなすつといふことを申せ。」と言つたので、(侍の)従者はふれ回つて、「備前から夜中に、そこにべ殿がお越しでございます。今朝もてなしがありません。登城してください。」と申し上げた。(家老たちは)おのおのきちんと身づくろいをして登城されたが、客といつてもだれもない。出された料理を見ると、そこにべの汁である。(集まつた者たちは)このような様子を申されて、大笑

6

消えてしまった目印

P. 85

解答

- (1) 例京は家のつくり方が似ていて見分けにくいから。
(2) ウ
(3) イ

れてあちこち尋ね歩いている。(主人は)やはりそうだったと思つて、「目印は。」と聞くと、「不思議なことだ。見えない。」と言つて。何を目印にしたのだ。」と重ねて聞く。「いや、確かに(宿の)門柱につばを付けておいた。」と言つて。あきれたことだ、それが役に立つものか。」と言つてさんざんしかつたところ、まだ(ほかに)目印がある。」と下人が言う。(「何だ。」と聞くと)「屋根に鳥が止まっていたが、これもいないよ。」と答えた。

7

けちな男のばかげたしわざ

P. 86・87

解答

- (1) あきない
(2) ① ウ ③ イ
(3) 例ある在家人の、歯を抜く際の代金を値切ろうとするけちな考え方。(30字)
(4) ア
(5) エ

- (2) ① 歯を一文で抜いてもらおうとしているのは「ある在家人」。
③ 「一文では歯を取らない」と言っているのは「歯取る唐人」。
(3) だれのことを気にくわないのか、どのようなことが気にくわないのかを読み取る。登場人物は「歯取る唐人」とある在家人。文章の冒頭で、在家人のけちでお金にいやしい性質が説明されている。この在家人は、虫歯を抜いてもらおうと唐人のところに来たが、歯を一本抜くのは「一文」と決められているのに、「一文で抜いてください」と値切ろうとしている。唐人は、この在家人のけちな考え方が「気にくわない」のである。

- (4) ↓ P. 87 出る問 ポイントを見よう! 漢字で書くと「大方」と

なる。

- (5) 在家人はわずか一文のために「良き齒」Ⅱ「疵なき齒」を、失っていること、また、Ⅱ「大きな損なり」が、空欄の直前の「心には利分とこそ思ひけめども」(Ⅱ心では得をしたと思つたのだから)に意味が続くことから、Ⅱが正解。ア唐人は「ただにて齒を取」っていない。イ前後の文と意味が通らない。ウ在家人は「悪しき齒のみ」でなく「良き齒」も取らせている。

【現代語訳】

南部に、虫歯を抜く唐人がいた。ある在家人で、けちで、自分の利益や財産を増やすことを第一とし、何かにつけて、金もつけばかり考えて、財産もあつた人が、虫歯を抜かせようとして、唐人のところにいった。歯を一本抜くには、お金二文に決めてあつたが、(在家人は)「一文で抜いてください」と言う。わずかな金額なので、ただで抜くこともできたのだが、(唐人は)その考え方が気に入らなくて、「けちして、一文では抜かない」と言う。長らく言い争つうちに、いつか歯を抜かなかつたので、(在家人は)「それでは三文で、歯を二本抜いてください」と言つて、虫歯ではない良い歯を加えて、二本抜かせて、三文払つた。心では得をしたと思つたのだから、虫歯でもない歯を失つたことは、大きな損である。この話は申すまでもなく、大いに愚かなことで、ばかげたしわざである。

出る問 類題

- 解答 ①イ ②エ ③エ

- ①現代語でも「夜もすがら語り合つた」などと使われることがある。「すがら」は、「初めから終わりまでずっと」という意味。
②現代と意味が異なるので注意。「このよにたぐひなく」(Ⅱこの世に並ぶものがなく)から意味を推測する。
③ここでの「あやし」は「不思議だ」という意味。この語も現代とは異なる意味で使われる。前後の博雅三位の行動から考える。

葉があることに着目し、その前から理由をつかむ。「誰あつて、猫の首へ鈴を付けに行かう」と言う者なければ(Ⅱだれも、『猫の首に鈴を付けに行こう』と言う者がいないので)が、相談が終つてしまつた理由である。

- (5) 「後先の勘弁なく、了簡ありげに口をたたく者は、……恥をかく」を言い表したことわざが空欄に入る。

【現代語訳】

ある時、ねずみが大勢集まつて相談した。中には、「いつも、あの猫という悪がしい者に捕られる時、何度後悔しても、そのかいがいい。あの猫が、声を立てるが、足音でもせれば、前もって用心して捕られない心構えをするのだが、こつこつ近寄つてくるので、そのつど油断して捕られるのだ。どうすればよいだろう」と言つたところ、一匹のねずみが進み出て申した。中には、「それには、何より良い方法がある。あの猫の首に鈴を付けておいたなら、たとえ足音はしなくても、こちらに油断はないだろう」と言つて、みんな「最もよい方法だ」と言つたが、大勢のねずみの中から、だれも、『猫の首に鈴を付けに行こう』と言つ者がいないので、結局その相談は終わってしまった。そのように、人もあと先の考えなく、具体策があるかのようにへちやへちやよくしゃべる者は、ねずみと同じで、最後には恥をかくものなので、『口は災いの門』と思つてきた。

出る問 類題

- 解答 (1)すえたり (2)いとおさなければ (3)はじかわして (4)いづれもみそつなれども (5)いつていつみ

- (1)すえたり↓すえたり
(2)いとをさなければ↓いとおさなければ
(3)はじかはして↓はじかわして 語頭の「は」はそのまま。
(4)いづれもよささうなれども↓いづれもよさそうなれども

【現代語訳】

博雅三位は、月が明るかつた夜、直衣姿で、朱雀門の前で(音楽を)奏し、夜とおし笛をお吹きになつた時に、同じ格好をした人が来て、笛を吹いた。だれだろうと思つていたが、その笛の音は、この世に並ぶものがなくすばらしく聞こえたので、(博雅三位は、笛の主はだれかと)不思議に思つて近寄つて見ると、まだ見たことのない人であつた。

8 猫の首に鈴を付けるのはだれ?

P. 88・89

- 解答 (1) a ゆえ b いふ (2) ア (3) エ

- (4) 例猫の首に鈴を付けに行かうと言ひ出すものがだれもいなかったから。

- (5) イ

出る問 ポイントを見よう!

- (1) ↓ P. 89 かい特有のひらがな。「あ」と字形が似ているので、区別する。
(2) ア「鼠の大勢集まりて」は、「鼠が大勢集まつて」と訳すことができ、「鼠」が主語を表しているところから、この「の」は主語を表す「の」。このほかの、イ「一つの鼠」、ウ「猫の首」、エ「鼠の中」の「の」は、どれも前の言葉に付いてあとの言葉を詳しくしている「の」。よつて他の三つと意味・用法が異なるのは、ア。
(3) 「こなた(此方)」は「こちら」という意味の指示語。現代でも使われる「かなた(彼方)」と対応している言葉である。
(4) 直前に「なければ」(Ⅱなかったのだ)という理由を表す言

- (5) あていふやう↓いいていうよう 「au→o」に注意。

【現代語訳】

- (1) 鷹小屋に、鷹を十羽ずつとまらせていた。
(2) とても幼いので、竹のかごに入れて育てる。
(3) 大人になつたので、男も女も互いに恥ずかしく思ひ合つていたけれども、男はこの女を妻にしたいと思つた。
(4) (白鷺の絵は)どれも一見よくできているけれども、この白鷺の飛び上がっている(ところ)は、羽の使い方がこのよつては飛べないだろう。途中に人がいて言つたことには、「あなたに籠を売つた人は、この下流の渡り場で、舟がひっくり返つて死にました」。

9 人のおだてに乗つてはいけない P. 90・91

解答

- (1)おもつよう (2)ことのほか (3)ア (4)ウ (5)エ

- (2)「すぐれて」は「特に」という意味。前後を含めると、「よるづの鳥の中にすぐれてうつくしく」(Ⅱすべての鳥の中で特に立派に)となる。この代わりにはあてはまる言葉を探す。「すべての鳥の中でことのほか立派に……」となると、意味がよく通じる。

- (3) ↓ P. 91 敬意を表す表現を使っていることから、狐の会話の相手である「鳥」のことについて述べていることがわかる。人物の関係

をつかむときには、敬語にも注意を向けてみるとよい。

- (4) 鳥が「げに」(「その通り」と思ったのは、狐がどのような「話の進め方」をしたからか、という問題である。狐は、「立派だ」「お声もよくていらつしやる」とほめることで、鳥の自尊心をくすぶり、声を出させるように話を進めている。その結果、まんまと鳥がくわえていた肉をせしめたのである。つまり、「自分の意図する方向」に話を進めているので、ウが正解。

- (5) エピソードと関連する教訓を選ぶ。狐の口車にうまく乗せられて、鳥が肉を奪われるという筋書きに合うものはエ。なお、『伊曾保物語』の「鳥と狐との事」の文章では、この引用箇所あたりに「そのごとく(「そのように」)、人、いかに賞むるといふとも、いさか誠と思ふべからず。」(「人、どのようにほめるとしても、少しも本当のことと思ってはならない。」)という教訓が述べられている。

【現代語訳】

ある時、狐が、えさを見つけられず、あちうちうさまよっていたところ、鳥が、肉をくわえて木の上にいた。狐が心に思うことは、「わたしはこの肉を横取りしたい」と思って、鳥がいる木の下に立ち寄って、「もしあなた。あなたはすべての鳥の中で特に立派に見えなさいます。とはいえ、少しもの足りなくいらつしやることは、お声が鼻声でいらつしやることです。でも、この世間で申しておりますことは、『お声も非常によくていらつしやる』などと申しております。どうか一声聞かせてもらいたいものです」と言ったので、鳥は、「言われたことをその通りだと思って、それならば声を出そうと、口を広げた瞬間に、とつとつ肉を落としてしまった。狐はこれを取って逃げ去った。

出る問題 類題

- 解答 (1) A E B A C A

- (3) 身をふくらましたかえるの皮が破れてしまい、「腸」が出てしまったのだから、死んだということ。「むなし(空し・虚し)」は、体があつて魂がない状態を表し、「空しくなる」は「死ぬ」「亡くなる」という意味である。覚えておこう。

【現代語訳】

ある川のほとりで、牛が一匹、あちうちうさまよって歩いていましたところ、かえるがこれを見て内心思うことは、「自分の体をふくらましたなら、必ずあの牛の大ききほどになる」と思って、「さつと伸び上がり、体の皮をふくらませて、子どもたちに向かって、今はこの牛の大ききくらいになったか」と尋ねたところ、子どもたちがあざ笑って言うには、「まだそのくらい(の大きき)ではない。申しにくいですが、あなたは牛に似ていらつしやいます。まさにかぶの形に見えました。お皮の縮んでいるところがごびますので、もう少しおふくれになったなら、きつとあの牛の大ききにおなりになるでしょう」と申し上げると、かえるが答えて言うには、「それはとても簡単なことだよ」と言って、力のかぎりえいっと体をふくらましたところ、意外にも皮が急に破れて、はらわたが出て死んでしまった。

そのように、身に不相応な能力や立場を望む人は、望みをかなえることができず、結局は自分の望みが原因で、かえってわが身を滅ぼすことがあるのである。

出る問題 類題

- 解答 (1) (初め) 昼の飯 (終わり) まぬれ
(2) とくは食ふた
(3) (初め) いや、 (終わり) ふたは

- (1) — 線①の「いふ」に着目。ふつう「いふ」申すなどの直後から会話が始まる。終わりは引用を示す「と」の直前まで。
(2) 直後に「と返事せらるる」とある。

- (1) 登場人物は「宇治殿」、「内裏(帝)」、「ある蔵人」、「御使」の四人。この四人を中心とした場面の状況をつかむ。

宇治殿……「葉二つ」という笛を持っている。

内裏(帝)……それを聞いて、「ある蔵人」に命じて召し上げようとした。

ある蔵人……それを「御使」に命じた。

御使……「宇治殿に、『御使はふたつ』召し上げる」と申し上げて、

「笛」だと言わなかった。

宇治殿……「老後に『葉二つ』召し上げられたらつらい」と返事した。

【現代語訳】

宇治殿が、葉二つという笛を伝えているのを(帝がお聞きになって、帝からある蔵人に命じて、その笛をお召し上げになった時、(蔵人の)使いの者が、(帝が)「おはふたつ、召し上げるといふ事情だけを(宇治殿に申し上げて、笛ということを申さなかつたので、(宇治殿は)老後に葉を二本、召し上げられますことは、つらいことだと、お返事に申し上げなかつたのは、一つの予想外のことであった。

10 お腹がパンクした蛙

P. 92・93

- 解答 (1) a えじき b ついに

(2) (初め) いまだ (終わり) ひなん

(3) ウ

(4) ア

- (2) ↓ P. 93 出る問題 ポイントを見よう! 会話の流れをおさえて考える。

- (3) 「いや、」が、法師の「いまだ九つはならず」に対する児の否定の返事であることに注意。終わりは末尾の「と」の直前まで。

【現代語訳】

法師が山へ行く時、児に言う。「昼の飯を棚に置いておいた。九つ(「正午の鐘が」鳴ったら、食べなさい」と教えた。この法師は、思ったより早く昼前に、(用事が)終わって帰る、(棚を)見ると児の飯がない。「これはよくわからないことだ」と思ったところ、(児に)尋ねる。(すると「すでに食べた」と返事をする。(法師が「まだ九つにならない(「九つの鐘は鳴らない)。どうして(食べたのか)と言つと、いや、今朝(午前八時に)五つ、さつき(午前十時に)四つ打つたので、(あわせて)九つ鳴ったので、食べたよ」と(答えた)。

11 蟻の恩返し

P. 94・95

- 解答 (1) さそい

(2) かかりける

(3) 木末を

(4) 例蟻が恩返しのために鳩を助けたこと。(17字)

(5) ウ

- (2) 第一段落は「蟻を救う鳩」、第二段落は「鳩を救う蟻」という場面。なお、「そのごとく」から始まる第三段落には、教訓が述べられている。

- (3) — 線①の前の部分から、指定された字数にも注意して、鳩がどのようにして蟻を助けたかが書かれた部分を探す。

- (4) — 線②の主語が「その人」、つまり、とりもちて鳩を捕らえようとした人であることに注意。「その人」が知らないきさつとは、鳩に助けられた蟻が、その恩返しに鳩を助けるため

に「その人」にかみついたということ。なお、――線②の直後に「しかるに、鳩これをさとりて」とあるように、鳩はそのいきさつを知っていたことがわかる。

(5) 線③は「人の恩を受けたような者は、どのようにしてでもその恩返しをしようと思う気持ちを持つべきである」という意味。これに合うウが正解。蟻が鳩に助けられてその恩返しをしたというエピソードにも合う。ア・イ鳩は蟻からの恩を期待したり、恩を受けたいと思ったりして蟻を助けたわけではないので誤り。エ「報いを期待してもよい」が誤り。

【現代語訳】

ある河のほとりて、蟻が遊んでいたことがあった。突然（とつぜん）（河の）水かさが増えてきて、この蟻を巻き込んで流れた。（蟻が）浮いたり沈んだりするところに、鳩が木の枝からこれを見て、「かわいそうな様子であるよ。」と、枝を少し食いちぎって河の中に落としかつたところ、蟻はこれに乗って岸に上がった。こつしたところに、ある人が、竿の先にとりもちを付けて、この鳩を捕らえようとした。蟻が心に思うことには、「たつた今の恩を返そう。」と思い、その人の足にしっかりと食いついたので、（その人は）おびえ上がつて、竿をあちらに投げ捨てた。その人は、このいきさつを知るか、いや知らない。しかし、鳩はこれを悟つて、どこへともなく飛び去つた。そのように、人の恩を受けたような者は、どのようにしててもその恩返しをしよつと思つ氣持ちを持つべきである。

12

僧はいったい何歳なのか？

P.
96

解答

(1) といければ
(2) 74 (漢数字は不可)
(3) エ

お世辞でも、「お年よりも、ずっと若くお見えになります」と（人が）言うのは嬉しく、「ひどくふけてお見えになります」と言えば、もの寂しく残念であるのは、人間みな心の心である。

13

蜂飼の大臣の手がら

P.
97

解答

(1) にわかにおちて
(2) 人々、刺されじとて、逃げさわぎけるに、(19字)
(3) 才

(2) 「蜂の巣にはかに落ちて」(＝蜂の巣が突然落ちて)に着目し、これ以降から人々の様子が描かれている部分を探す。

(3) 上皇は「かしこくぞ、宗輔が候ひて」(「運のよいことに、宗輔がそばにいてくれてよかった」と言っている。この時、蜂の巣が落ちて人々が逃げ騒いでいたことから考えると、宗輔がとっさの判断で上皇の御前の枇杷を使って蜂を集め、騒ぎをおさめたことに感心したとわかる。よって才が正解。ア「優雅であつた」とは書かれていない。イ「枇杷の実を食べる」が誤り。ウ「蜂を傷つけないような心優しいふるまい」が見当違い。エ「役に立つ」と思つて蜂を飼つていたとは書かれていない。

【現代語訳】

この殿（ニ宗輔）が蜂を飼つていらつしやるのを、世間の人は、「役にも立たないことだ。」と言つていたが、五月のころ、鳥羽殿（とよはの）で、蜂の巣が突然落ちて、（上皇の）御前に（蜂が）飛び散つたので、人々は、刺（さ）されまいとして、逃げ騒いだところ、相国（あひだく）（ニ宗輔）は、（上皇の）御前にあつた枇杷を（みだ）二房取つて、琴爪（ことづめ）で皮をむいて、頭の上に差し上げたところ、すべての蜂が（枇杷に）群がって、飛び回らなかつたので、供の者をお呼びになつて、（その枇杷を）そつとお渡（わた）しになつたところ、上皇は、「運のよい

(4) 六十に余り候ふ

(5) **例** 実際の年齢よりも若く見られたいという心。(20字)

(2) 阿闍梨は年齢を聞かれ、はじめ「六十に余り候ふ」(「六十歳には余る」と答えている。さらに、いくつ余っているか聞かれ、「十四余りて候ふ」と答えているので、六十+十四=七十四歳が正解。設問に「算用数字で」とあるので、注意する。

(3) 線②の「見えければ」とは、「見えたので」という意味。阿闍梨が「七十に余りて」見えたので、「六十に余り候ふ」という阿闍梨の答えを「不審に」（＝疑わしく）思ったのである。工の「七十歳代に見えたので」が正解。アは阿闍梨が「七十歳」と答えたことを前提としているので誤り。イは「余りて」の意味がとらえられていない。ウは八十歳代くらいに見えたことを意味し、かけ離れすぎているので誤り。

(4) 「かく」は「このように」という意味の指示語。「六十といへば……かくいひける」とあるので、阿闍梨の会話文から、「六十」と言っているものを探す。

(5) 「……は、人ごとの心なり」とあるので、直前の「色代にも、……本意なき」から読み取れる心情を字数に合わせてまとめる。

【現代語訳】

武州に西王の阿闍梨あせりという僧がいた。「お年は、いくつにおなりになりましたか」と、人が尋ねたところ、「六十に余るくらいです」と言つが、（尋ねた人には）七十歳代に見えたので、疑わしく思われて、「六十を、いくつほど余つていらつしやるのですか」と尋ねると、「四十余つています」と言つた。かなり余つてゐることだなあ。七十歳と言つよりも、六十歳と言へば、少し若い気持ちがするのて、このように言つたのだ。（これは）人のふつつの心である。

14

孝行心がもたらした不思議な力

P.
98

解答

(1) イ
(2) 例虎を追い払うこと。(9字)
(3) 天
(4) 例楊香の、自分の命と引きかえに父の命を助けようとした行為。(28字)
(5) ウ

(1) 現代語での「たちまち」は「すぐに」の意味で使われることが多いが、古語では「突然」^{とつぜん}「急に」の意味で使われることが多い。前後の文脈から考えても「突然」が正解。

(2) 直前の「虎を追去らむとし侍りけれども」に着目する。この「ども」は逆接を示す接続助詞で、「虎を追おい払はらおうとしましたが、」↓「かなはざるほどに」（Ⅱでできなかった）と続く。したがって、できなかったのは、「虎を追おい払はらうこと」である。

(3) 「御あはれみ」「祈りければ」などの言葉から、空欄に入るのは神仏のような存在であると考えられる。そして、祈った結果「さすが天もあはれと思ひ給ひけるにや」(「やはり天の神も気の毒に思ひになったのか」とあることから、「天」があてはまるとわかる。

(4) 父を助けるために自分の命を犠牲にしようとした楊香の行為を三十字以内でまとめる。

(5) 「奇特」とは、不思議な力といった意味。楊香が天に祈った

結果、どんな不思議が現れたかを読み取る。「あらき虎」が、楊香が追い払おうとしてもだめだったのに、「にはかに（＝急に）尾をすべて逃げ退」いたことを指している。よってウが正解。ア楊香が虎を退治したわけではないので誤り。イ二人が逃げたのではなく、虎が「逃げ退」いたので誤り。エ楊香が虎を手なずけたのではないので誤り。

【現代語訳】

楊香には一人の父親がいた。ある時父と一緒に山の中へ行ったら、突然荒々しい虎にあった。楊香は、父が命を失うようなことを恐れて、虎を追い払おうとしたが、てきなかつたので、天の神のご慈悲を頼りに、「どうか、私の命を虎に与え、父を助けてください」と、誠意を込めて祈ったところ、やはり天の神も気の毒にお思になったのか、今まで荒々しい姿で、（楊香父子を）取って食らおうとしていたのに、虎は急に尾をすぼめて逃げ去ったので、父子ともに虎口の難（虎に食べられること）を逃れ、無事に家に帰りましたというのだ。これはひたすらに孝行の心が深いために、このような不思議な力が現れたのだろう。

15

良いことをまねるのは良いことだ

P. 99

解答

- (1)とわせたまいければ
(2)知れる者
(3)ア
(4)(初め)彼は先 (終わり) するか
(5)例孝行な子をまねるのは、孝行な子と同じようなもので、良いことだと考えた (34字)

- (2) 古文では、主語が省略されたり、一文の中で主語が変わったりすることがあるので、主語を自分で補って読む必要がある。

16

盗まれた小袖を泥棒に返した尼

P. 100・101

解答

- (1)うさせ給へ
(2)ア
(3)イ

- (1)「尼うへのいはれけるは、」の直後から「尼うへ」の会話が始まっている。終わりは「とありければ」の「と」の直前まで。この問題のように、会話文が長く、複数の文を含んでいる場合があるので、文の意味を正しく読み取ることが大切である。

- (2) ↓ P.101出る問 ポイントを見よう！

- (3) 盗人が盗んだ物を全部返した理由をとらえる問題。直前に「て」（＝と言って）とあるので、その前の会話文「あしくまゐりにけり」（＝悪いところ、盗みに入るべきではないところに参上してしまつた）に込められた、盗人の気持ちを考える。盗人は、尼やその妹の心にふれて自分たちがしたことを後悔しているのである。したがって、イが正解。ほかはどれも見当違い。

【現代語訳】

横川の恵心僧都の妹、安養の尼の所に、強盗が入った。品々をみな盗んで出ていってしまったので、尼上は、紙ぶすま（＝紙で作った寝具）というものを身に付けていらつしたところ、姉である尼の所に小尼公という方がいたのだが、（その小尼公が）走って参上して見たところ、小袖を一枚（強盗が）取り落としていったものを取って、「これを盗人が取り落としていました。着てください」と言つて、持ってきたところ、尼上がおつしたことは、「盗人は」これも盗んだあとは、自分の物だと思つてしょう。持ち主が承知しないようなものを、どうして着ることができますか、いや、できません。盗人はまだ遠くへはまさか行つてないで

「ある男」について「いかなる者ぞ」とお尋ねになられたのは「水戸中納言殿」で、それに答えて「彼は人に……押し候ふなり」と答えたのは「（ある男を）知れる者」である。

- (3) 線②の少しあとに「母を負ひて」とあるが、これが「ある男」の「年老いたる女を負ひて」と共通していることに着目する。
(4) 「……とささやきければ」とあるので、「と」の直前までが会話文だと判断できる。また、ささやいたのはこの文の冒頭の「従者」だと推測できるので、会話文の初めは「従者これを怪しがりて、」の直後の「彼は先のこと」からである。

- (5) 「かの殿うち笑ひて」のあとの会話文「孝子をまねるは、……やつかな」から読み取れる。「孝子」は親孝行な子のこと。

【現代語訳】

水戸中納言殿が、狩りにおいてにられた時に、ある男が、年老いた女を背負つて、道ばたに休んでいたのを、（中納言殿が）「どのような者か。」とお尋ねになられたところ、（その男を）知っている者がいて、「彼は人々に評判になっている孝行者であつて、母を背負つてお狩りの様子を拝見しているのをごいします。」と言つた。中納言殿は、大いに感心なさつて、米やお金をたくさんお与えになった。その後、また、ある所で、同じような者に出会つてお尋ねになると、（その人は）母を背負つて、ある所へ行くとことを申し上げた。従者はこれを不審に思つて、「彼は以前の話を聞き、それと似たことをして（ほつびの）物をいただこうとしているのではないか。」と（殿に）ささやいたところ、その殿は笑つて、「孝行な子をまねるのは、孝行な子と同じようなものである。良いことのまねをするやつだなあ。」と言つて、前回と同じように、米やお金をお与えになった。

出る問 類題

解答 (1)イ

しょう。急いで（盗人のところに）持っていらつしやつて、（この小袖を）取らせてください。」と言つたので、（小尼公は）門のほうへ走り出て、「もしも」と（盗人を）呼び戻して、「これを落とされました。確かに差し上げましょつ」と言つたところ、盗人たちは立ち止まつて、しばらく考えている様子で、「悪いところに参上してしまつた」と言つて、盗んだ品々をも、すべて返し置いて帰つてしまつたという。

- (1) 「ひしと」の解釈がポイント。「ひしと」は「びつしりと」という意味。語の意味がわからない時は、誤りの選択肢を外していくとよい。ア果をとろうとしている人に「ひそかに」近づく意味がないので誤り。ウ蜂は刺そうとする時、からだを「必死に」ぶつかけたりしないので誤り。エ——線部の主語は蜂なので誤り。

【現代語訳】

吉野の奥では蜜蜂というものを飼つて、多くの蜜をとるをしている。これ（＝蜜蜂）を飼っていた人が（次のように）語つた。
まずこれを手に入れるには、（蜜蜂が）いるだろうと思つた山の本陰を探し歩いて、やつと見つけ出してこれをとろうと思つ時、衣服を脱いで、頭から始めて手足の裏までも残るところなく蜜をたつぷりと塗りつけて行くのである。そしてその蜜を取ろうとすると、蜂どもがたくさん飛び出して、その（蜜を取ろうとする）人を刺そうと思つて体にびつしり取りつくが、その（体に塗られている）蜜の香りをかき分けて、自分の仲間だと思ふのだろうか、少しも刺さないといい言つていた。

17

芸は國王を助ける

P. 102・103

解答

- (1) かなわす
(2) ウ・エ (順不同)
(3) 例 喜陵が鈴てお手玉の芸をしたのに敵が見とれ、楚王を追いかけるのを忘れたから。
(4) イ

↓ P. 103 出る問 ポイントを見よう!

- (3) なぜ楚王は敵から逃げのびて命拾いできたのかという問いである。設問に「喜陵がしたことを含めて」とあるので、喜陵がどのようなことをした結果、王が助かったのかをまとめる。喜陵が九つの鈴を使って「天下無双の」お手玉の芸をしたことで、敵が喜陵のすばらしい芸に見とれて楚王を追うことを忘れてしまい、楚王は助かったのである。このいきさつをまとめる。
(4) この文章の中心となる内容は、喜陵のお手玉という一見何の役にも立たないと思われる芸のおかげで、楚王の命が助かったこと。この内容に合うのはイ。

【現代語訳】

中国の楚國の王と宋國の王との合戦があった。楚國の王は戦いに負けてお逃げになったところを、敵が追いかけて、今まさに殺そうとする時、喜陵という家来がいた。この人は九つの鈴を使ったお手玉をすることが、天下に並ぶものがないほど上手である。急いで主君の馬の後ろへかけつけ立ちふさがり、(王を) 守り戦ったがてきなかつた。そうするうちにあの九つの鈴を取り出し、いろいろなさまさまにお手玉したところ、敵たちがこの様子を見て、「ああおもい。」と見物して、楚王を追いかけて申し上げようとするところを、すっかり忘れていた間に、楚王は逃げのびて危ない命

「うい」と言っ、しゃへいあげて、おいおいと泣いたので、がっかりさせられる話だよ。

18

ねずみにえさを与えた優しい男

P. 104・105

解答

- (1) あてがわるゆえ
(2) 例 新しい礼服の肩を食い破った (13字)
(3) ア
(4) ウ

↓ P. 105 出る問 ポイントを見よう!

- (3) 「ねずみ狩りせむ」と騒ぐ家臣を「主」が制していることや、線②の直後で「今より食事与へよ」と言っていることに着目。これらの内容に合うのはア。
(4) 最後の文で、「ねずみもかかる悪事(麻袴を食い破ったこと) 後々はなさざりし」とある。「ある人(主)」の優しい心と「ねずみは糊あるものを食ひがち」「食事をあてがはざるゆゑ」などの判断による対処の結果、ねずみもその後悪さをしなくなつたというので、ウが正解。

【現代語訳】

ある人が正月の準備というので、礼服を新しく作つておいたものを、ねずみが(その) 肩(の部分) を食い破つたので、妻などは(それを大変なことだと) 気にして、(また) その家臣などは怒つて大声を出し、「憎いねずみのしわざよ。ねずみ狩りをしよう。」と、集まつて騒ぎ立てていたのを、主人は厳しく制止して、「ねずみは糊のついたものを食べるものが多いものだ。食べ物と分け与えないから、(このように) 何もするものだらう。全く気にするべきではない。(これからは) (ねずみに) 食べ物を与えな(く) 気をつけよう。」と決めてねずみ狩りなどしてはならぬと。と厳しく

が助かりなかつた。

出る問 類題

解答

- (1) ①(あなかの) 児 ②僧 ③(あなかの) 児
④実 ⑤(あなかの) 児

- (1) ①主語が直前にないので、前の部分にさかのぼって見ると「あなかの児」と登場人物が示されている。——線①の直後の「この児」にもうまくつながることを確認する。

- ②この主語は前には書かれていない。「この児さめざめと泣きけるを見て、」のあとに「僧のやはら寄りて」とあるので、泣いている「児」を見て「近寄ってきたのは「僧」だとわかる。
③泣いている「児」に対して「この花の散るを、惜しう覚えさせ給ふか」「この花が散るのを、残念に思いになるのか」と聞いていることから判断する。

- ④「実の入らざらん」の「の」は、「実が入らない」というように訳すことができるので、主語を「示す」の。
⑤「……実の入らざらん思ふがわびしき」と言っ泣いたのは「児」。

【現代語訳】

これも今となつては昔のことだが、田舎の児て比叡山に登つて行つた児が、桜がみごとに咲いていたところに、風が激しく吹いたのを見て、この児がさめざめと泣いたのを見て、(ある) 僧がそつと近寄り、「なぜこのように泣きになるのか。この花が散るのを、残念に思いになるのか。桜の花は(もともと) はかないもので、このように散ればもたないうちに散るのです。けれども、それだけのことで「と慰めたところ、桜の花が散るのは、しいていふといつてはならない、さしつかえありません。私の父が作った麦の花が(この風で) 散つて、実が入らないことを思つとつ

言いつけた。このような男であつたからか、まもなく事のなりゆきもつまく運び、またねずみもこのような悪さを以後はしなかつたといつてた。

出る問 類題

解答

- (1) イ

- (1) ①は何を見て「あが仏、何事思ひたまふぞ」と翁は言つたのか、②はかぐや姫が何を見ると「物思す気色」になると翁は言っているのか考えて、それぞれ前の部分から指示内容を探す。なお、②の前の「月な見たまひそ。」の「な……そ」は禁止を表す古文特有の言い方。「な見そ」「見るな」となる。

【現代語訳】

かぐや姫がいる所に行き着いて、見ると、やはり思い悩んでいる様子である。(翁が) これを見て、「私の大切な人よ、何を思い悩んでいるのですか。お思ひになつてゐるのはどんなのですか。」と言つた。かぐや姫は「思つたのは(何も) ありません。なんとなく寂しく思われるのです。」と言つたので、翁は、「月を見てくださるな。これを(覧) になると、思い悩みなさる様子がありませんよ。」と言つたところ、いつて月を見ないでいられまじやう、いや、いられます。」と言つて、やはり月が出る(縁側) に出てすわり、嘆き思い悩んでいる。

19

気が弱すぎた笛の名人

P. 106・107

解答

- (1) たぐいなく
(2) イ
(3) 例 だれにも遠慮せずに、思うままに笛を吹いてほしいという心遣い。
(4) エ

- (2) 「ゆゆし」は「たいへん」「非常に」などと訳し、程度がはなはだしい様子を表す。この古語の意味はぜひ覚えておこう。「心おくれ」は、「気おくれ」といった意味。明宗は、「院」(堀河天皇)に笛を演奏するよう召された(「呼ばれた」が、「帝の御前と思ふに、臆して、わななきて、え吹かざりけり」(「天皇の御前と思ふと、気おくれして、震えて、吹くことができなかった」となってしまうことから、イの「たいそう気が弱い人」であることがわかる。
- (3) 明宗の笛を聞くことができず残念に思われた堀河天皇は、「私に坪の辺りに呼びて、吹かせよ。われ、立ち聞かむ」(「個人的に中庭の辺りに呼んで、吹かせなさい。わたしは、立ち聞きしよう」と言っている。ここからは、気が弱い明宗に、自分に遠慮することなく思う存分気ままに笛を吹いてもらいたいという心遣いが感じられる。設問に「どのような心遣いが」とあるので、「...という心遣い」という形で答えを書く。

(4) ↓ P 107 出る問 ポイントを見よう！

【現代語訳】

堀河天皇の時代、勘解由使の次官で明宗という、すばらしい笛の奏者がいた。たいそう気が弱い人である。堀河天皇が、笛をお聞きになりたいと思つて、(明宗を)お召しになった時、(明宗は)天皇の御前と思つて、気おくれして、震えて、吹くことができなかった。

(堀河天皇は)残念に思われて、(明宗を)よく知っている女房におつちやつて、「個人的に中庭の辺りに呼んで、吹かせよ。わたしは、(それを)立ち聞きしよう」と命令があつたので、(その女房は)月夜に、(明宗と)約束を交わして、(笛を)吹かせた。(明宗は)「女房が聞く(だけだ)」と思つて、遠慮せず思うままに吹いた。世に並ぶものがないほど、みごとな音色であつた。

天皇は、感動して「おもしろいことがおできになりました。」「普段、笛の名人とは聞いていたが、これほどまてとは思わなかつた。より一層すばらしい」と

(4) ①ぞ

②係り結び(の法則)

- (1) 「江匡衡といふ博士に問はれければ」とあるので、そのあと「の匡衡の答えに着目する。会話文の中の「これ、めでたき御吉事なり」が、犬が子を生んだことについての匡衡のとらえ方。
- (2) 「ありがたき」の解釈がポイント。「ありがたし」は、「有り難し」と書き、有るのが難しい、つまり「珍しい」「めつたにない」という意味。この古語の意味はぜひ覚えておこう。
- (3) Aは「生れさせたまひて」(「お生まれになって」、Bは「いたらせたまふべし」(「おなりになるでしょう」と敬語表現になっているので、いずれも身分の高い人を表す言葉が入ると考えられる。直前に「かかれば」(「こういふわけで」とあるので、その前の部分を見ると、「犬」の字の説明の中に「天子」「太子」という言葉が見つかる。「天子」とは天皇のこと、「太子」とは皇太子のことなので、Aには「太子」、Bには「天子」が入ると判断できる。

(4) ↓ P 109 出る問 ポイントを見よう！

【現代語訳】

そういえば、この「一条天皇の時代に、一つ不思議なことがあつた。上東門院の御方の寝所の中で、犬が子を生んだが、予想もしない珍しい出来事であつたので、(上東門院の御方は)たいへんお驚きになって、江匡衡という博士にお尋ねになったところ、これは、喜ばしい縁起のよいことです。「犬」の字は、「大」の字のそばに点を付ける。その点を上につければ、「天」(の字)である。下に付けば、「太」(の字)である。その下に、「子」の字を続けて書けば、「天子」とも、「太子」とも読めるでしょう。こういふわけで、太子(皇太子)がお生まれになって、天子(天皇)におなりに

お言葉を発せられたので、(明宗は)「さては、天皇がお聞きになっていたのだ」と、たちまち気おくれして、動揺したので、縁側から落ちてしまった。

出る問 類題

解答 (1)例主人を選ばせたかつたから。(13字)

- (1) 直後の板倉伊賀守の言葉に注目する。争っている二人に等しい条件を与え、「生れてよりそだてなれたる方へこそ行くべけれ」(「生まれてから育ててなつている方へ行くに違いない」と言つて、猫に本物の主を選ばせている。

【現代語訳】

京で猫を失つた者がいた。路地や小みちまでも、身がやつれるほど苦労して探したが、ある所で思いがけなく見つけて、「これは私の猫だ」と言つた。あるじが出てきて「おまえの(猫だ)という証拠は(あるのか)」「(と言つ)。また(猫を探していた者も)」「おまえの(猫だ)という証拠は(あるのか)」「(と言つ)。一方は猫を失つたのが惜しく、一方は猫を手に入れたという争いなので、どちらが正しいか、最後まではっきりしない。

板倉伊賀守は、どちらが正しいかを争つ二人を対面させて、例の猫を座敷の中央に置き、「もこの持ち主も、今の持ち主も、手に経節を一つずつ持つて(猫を)呼びなさい。生まれてから育ててなつている方へ行くに違いない」と(言つ)。案の定、初めに(猫を)失つた者の膝の上に、(猫は)鳴きながら行つたということだ。

20

「犬」の字がめでたいわけ

P. 108・109

解答

- (1)めでたき御吉事(7字)
(2)ア
(3)A太子 B天子

なるでしょう」と申し上げた。

その後、予想した通り皇子が御誕生になって、まもなく(天皇の)位におつぎになった。後一条天皇が、この方である。匡衡は、詩歌の才能に秀でているだけでなく、このような心遣いも深かつたのだ。

出る問 類題

解答

- (1)こそ (2)①なむ ②や

- (1)・(2) 係助詞の種類をきちんと覚えておこう。「ぞ・なむ・や(やは)・か(かは)・こそ」の五つである。結びの語の活用形は、終止形以外であることを覚えておくとうい。

【現代語訳】

- (1) 今ときのさまざまなこと珍しいことを、言い広め、もてはやす人は、また、受け入れられない。(逆に)世間で言い古されてしまつて知らない人は、奥ゆかしい。
- (2) ①名を、さめきのみやつこといった。
- ②つむじ風は常に吹くものだけれど、このような(ひどい)ことがあるだろうか。

21

名人はこうありたいもの

P. 110・111

解答

- (1)ひとしおつるわしく
(2)イ
(3)例角を振り尾を立てて闘う牛。(13字)
(4)エ

- (2) 直前に「牛飼ふ童これを見て笑ふ」とあること、直後に「牛飼ふ童」が笑つた理由を説明していることから考える。

- (3) 「その絵」とは、戴嵩が描いた牛の絵のこと。文章の初めのほうで「角を振り尾を立てて、牛どもの鬪ふを描く」とある。

(4) ↓ P111 出る問 ポイントを見よう！

【現代語訳】

昔、唐（＝中国）の絵描きに戴嵩という者がいた。牛を描くのが上手だった。ある時、角を振り尾を立てて、牛たちが鬪うところを描いた。格別にみてごにできたと思つて、人々に見せた。その後、牛を動かしている子どもにこの絵を見せ、「おまえが朝夕動かしている牛とよく似ているか。」と尋ねた時、牛飼いの子どもはこれ（＝絵）を見て笑った。「どうして笑うのか。」と言つて、「牛飼いの子どもは」「牛が鬪う時は尾を立てずに腹に尾を付けるものだ。この絵は尾を立てているので、間違ひだ。」と言つた。戴嵩は驚き、なるほどなあと感心し、その絵を破った。本当に名人というものは何事によらず戴嵩のようであつたものだ。戴嵩ほどの牛描きであるけれども、実際の牛を扱ひ慣れないので、間違ひもあるかもしれないと、朝夕扱ひ慣れている牛飼いの子どもに見せたのは、名人の戴嵩であるからこそ（である）。

出る問 類題

解答 (1) イ

- (1) 直後の「これは」以降に着目する。「まけよ」（＝安くしろ）というのは魚売りの男に向かつて言つたのだから、谷風が負けるのではなく、魚売りのほうを負けさせるということになる。それなのに、魚売りの男に「まける」というのは閑取にとつて「いむべき事」と言われて、慌てて高い値段のまま鰹を買つてしまった。そのことを、作者は「ちとせきこみしと見えたり」と言つて、おかしいと考えているのである。これに合うのはイ。

【現代語訳】

閑取谷風梶之助が、新弟子を供に連れて、日本橋本船町を通つていた時、

てみやげにしよう」と（考え、かなりの大木なのでその袖を盗み取るような工夫をして、一人は木の下に立ち、（もう）一人はその木に登つたが、登る時は袖を取ることに気を取られてあれやこれやとして登り、（袖を取つては下に落ちて、木の下に立つた男が拾つてふところに入れたが、もうそろそろいいので、下じいていらつしやい」と下から言つたところ、）上の男は「わかりました」と言つて、その木を下りようとしたが、袖はとげのある木なので足や手を痛め、簡単に下りられない」と言つて、思ひのほか苦勞しているの、下に立つていた男が、飛び下りればよい」といつことを教えたところ、（上の男は「高い木なのでどうにも目が回つて飛べない」といつことを答えたので、下の男も困つて、「どうしよう」と思つたが、ふと思いついて、「泥棒泥棒」と声を上げたところ、上にいる男はひどく驚き木の上から飛び下りたので、手を取つて急いでその場所を立ち去つたといつことである。

出る問 類題

解答 (1) A ひちりきの音 (6字)
B 優なる心 (4字)

- (1) A あとの「聞いて深く感動し」から、「ひちりきの音」とわかる。B 本文最後の「むかしの盗人は、またかく優なる心もありけり」に着目する。

【現代語訳】

博雅の三位（＝源博雅）の家に泥棒が入つた。博雅は、板敷の下に逃げて隠れた。泥棒は帰り、そのあと、（博雅は）はい出て家の中を見ると残っているものはなく、みな盗まれていた。ひちりき一本がとびら付きの物入れ（の中）に残されていたのを、博雅が取つてお吹きになったのを、出て行つてしまつた泥棒が遠くでこれを聞いて、気持ちを抑えることができなくて帰つてきて、言つことには、「ただ今の御ひちりきの音を拝聴しましたが、しみじみと尊くございまして、悪い心はみな改まりました。盗んだ物を何もかもお返し申し上げましよう」と言つて、みな置いて出てい

鰹を買おうとしたが、値段が大変高かつたので、供の者に言いつけて、「負けよ」と言わせて通り過ぎたのを、魚を売る男が呼び止めて、「閑取が負けると言つのは避けなければならぬことである」と言つたので、谷風が引き返して「買え買え」と言つて買させたのもおかしいことであつた。これは谷風が負けるのではない。魚を売る男の方を負けさせることであるので、それほど避けなければならぬことではないのに、「買え買え」と言つたのは、少しばかり早とちりをしたと思われる。これは、わたしが若かつた時、まのあたりに見たことである。

22

ゆず泥棒のみごとなチームワーク

P. 112・113

解答

- (1) a ひろいつて b おおじい
(2) ア
(3) エ
(4) イ

- (2) 「下の男」が困つて思つたことであり、そのあと「ふと思ひつきて」と、よいアイディアを思いついていることから、アの「どうしよう」が正解。

- (3) 登場人物は、木の「上の男」と「下の男」。ア袖を取つては下に落としているので「上の男」。イ袖のとげて手足を痛めているので、「上の男」。ウ「目が回つて飛べない」と答えているので、「上の男」。エどうしようかと考え、ふと思いついて、「盗人盗人」と声を立てたのは「下の男」。よつて、エが正解。

(4) ↓ P113 出る問 ポイントを見よう！

【現代語訳】

ある若い者が、二人連れて、袖がたくさんなつていたのを見て、「取つ

てしまった。昔の泥棒は、またこのような優雅な心も持つていたのだ。

23

歌が書かれた母上手紙

P. 114・115

解答

- (1) イ
(2) ア
(3) エ
(4) ウ
(5) 例 母の長寿（を祈る）。

- (1) アこの文頭の「子」（＝男）が主語。イ「ひとつ子」（＝一人っ子）とは「子」のこと。これを「いとかなうしたまひけり」（＝たいそうかわいがつていらつしやつた）のは「母」。ウ「御文」は「母」からのもの。それを見たのは「男」。エ文頭の「かの子」（＝男）が主語。したがつて、イが正解。

- (2) 「いやし」は、身分や官位が低いという意味。現代語とは異なる意味で使われる場合が多いので、注意する。この古語の意味はぜひ覚えておこう。

- (3) 「十二月ばかり」のように上に数字があるときは、大体の範囲を表すことが多く、「十二月ごろ」と訳す。

(4) ↓ P115 出る問 ポイントを見よう！

- (5) この歌は、「男」がその母の歌「老いぬれば…」に対する返事として詠んだ歌であることに注意する。母の歌の「さらぬ別れのありといへば」（＝避けられない別れがあるといふので）を受けて、避けられない別れ（母の死）などなく、千年も生きてほしいと、母の長寿を祈つているのである。なお、「なくも

がな」の「もがな」は、「……といいなあ」という願望の意味を表す言葉。

【現代語訳】

昔、男がいた。官位は低いが、母は天皇の娘だった。その母は、長岡というところにお住みになっていた。子は京に宮仕えをしていたので、(母の元へ)参上しようとしたけれど、しばしばは参上できない。一人っ子だったので、(母は)たいそうかわいがっていらした。そうして、あるうちに、十二月(壬子)になり、急なことで(母から)お手紙があった。驚いて見ると歌が書いてある。

年をとったので避けられない別れがあるというので、ますます会いたいあなたです。

その子は、たいそう泣いて詠んだ。

世の中に避けられない別れがなければよいのになあ。(母に)千年も生きてほしいと祈る子のために

出る問題

解答

- (1) エ
(2) イ

- (1) 直前の和泉式部の言葉に注目する。「いて、あはれや」「まあ、かわいそうに」と言っているのが、エ「同情」が正解。
(2) 明日狩をしようと言っている晩に鹿がひどく鳴くことについて、「鳴くのは当然ですよ、今夜だけの命と思えば」と詠んでいる。

【現代語訳】

今となつては昔のことだが、和泉式部が、保昌とともに丹後の国に下つた折に、「明日、狩をしよう」と言つて、家来たちが集まつた夜、鹿がひどく鳴いたので、(和泉式部は)「まあ、かわいそうに。明日死ぬの、ひどく鳴いているのだわ。」「うしろを思つてゐる、」「そう思ひならば、狩をやめましよう。よい歌をお詠みになつてくださう。」「と言われて、

やがて人里に着いたので、(馬を借りた)お礼のお金を鞍豆に結び付けて、馬を返した。

出る問題

解答

- (1) エ

- (1) 俳句の前の文章から読み取る。特に直前の「あはれにもやさしくもおおえければ」「趣深く風情があると感じたので」がこの俳句を詠んだ理由である。

【現代語訳】

里に下ると日は西の山に沈んだ。粗末な(家の)軒先に立つて夜泊めてくれないかと頼む。寝具すらないので、寝ようにも寝付けない。宵の間は、じいさんがたいまつをともして、火のそばでとても小さいかきを編んでいる。何か。「と問うと、これは吉野の里の花簗です。」「と云つ。」「昔、蔵王権現が桜が散るのを惜しんで(花びらを)拾つて(簗に)お盛りになられたその言い伝えによつて、今も吉野の里では、貧しいものが家の副業として、ある時は、子どもの遊び道具として、また種を入れて播き始めれば秋によく実る。」「これを持つてゐるものは、すべての災難をまめかれる。」「と語る。趣深く風情があると感じたので、

みやげにしよう吉野の里の花簗(を)

25

用もないのに人を訪ねるべからず

P. 119

解答

- (1) エ
(2) イ
(3) エ
(4) 例すべし帰る

- (1) 作者は、「久しくあたる」「長い間居ること」に対して「い

当然ですわ。どうして鹿は鳴かないでいられますか。今夜だけの命だと思つて」

そして、その日の狩はやめたそうです。

24

「かさね」という名の女の子

P. 116・117

解答

- (1) ①ウ ②エ

(2) 例馬を貸してくれたことに感謝する気持ち。(19字)

- (1) ① ↓ P. 117 出る問題 ポイントを見よう!

② 芭蕉たちは、女の子に「かさね」という聞き慣れない上品な名が付いていたことに感動して「かさねとは…」の句を詠んでいる。エ「風流の…」の句も、「おく(奥)」「(奥州)の旅で聞いた田植え歌を、その旅で初めて出会った「風流」だと感動したことを詠んでいて、どちらも旅先で思いがけず出会った風流さが感動の中心となっている。

【現代語訳】

那須の黒羽という所に、知人がいるので、これから那須野を越えてまっすぐ近道を行こうとする。はるか遠くにある村を目指して行くと、雨が降り日が暮れてしまった。農夫の家に一夜の宿を借りて、夜が明ければまた野原に行く。そこに放し飼いの馬がいた。草を刈っている男に困っていることを訴えると、田舎の男といつても、さすがに情けを知らないわけではない。どうすればよいでしょうなあ。しかしこの野原は東西縦横に(道が)分かれていて、慣れない旅人は道を間違えてしまう、心配ですので、この馬に乗って行つてこの馬が止まるところで、馬をお返しください」と言つて貸してくれました。小さい子二人が、馬のあとを追つて走る。一人は小さい女の子で名を「かさね」という。聞き慣れない名が優美だったので、かさねとは、八重撫子の名であらう

とむつかし」と言っている。——線①のあとに「人と向かひたれば、……身もくたびれ、心も静かならず」などあることから、エの「わずらわしい」が正解。

- (2) この文章で出てくるのは、訪問する側と訪問される側の関係。用もなく長居されると、「よろづのことさはりて時をうつす」「すべてにさしつかえがあり、むだに時間を過ごしてしまう」ため、「互ひ」にとって「益なし」「無益だ」と言っている。

- (3) 第一段落と第二段落では、状況が異なることに注意する。第一段落では「さしたることなくて」「これという用事もなくて」訪問する場合や「用ありて行」く場合について、第二段落では「同じ心に向かはまほしく思はん」「互いに向き合っていたと思う」人を訪ねる場合について述べている。用もなく訪ねたり、長居したりするのはよくないが、相手が気が合う人で、工のように「今日は、ゆつくりと語り合いましよう」と話をすることを望んでいる場合は別だと述べているのである。

- (4) 設問に「用事があつて他人を訪問した時」とあるので、古文の「用ありて行きたりとも」に着目する。「そのこと果てなばとく帰るべし」を現代語に直し、空欄にあてはまる言葉を考える。

【現代語訳】

これという用事がなくて人のもとに行くのは、よくないことである。用事があつて行つたとしても、その用事が済んだらすぐに帰るのがよい。長居するのは、たいへんわずらわしい。人と向き合っていると、言葉は多くなり、体も疲れ、心も落ち着かない。すべてにさしつかえがありむだに時間を過ぎてしまうのは、互いにとって無益なことである。(かといって客に「はまひやそつに言つのもよくない。気に入らないことがある時は、かえつてその理由を言つてしまつほうがよい。)

(ただし、)同じ気持ちで互いに向き合つていたいと思う人が、ちょうど

ひまわり、もつてはるへへ、今日は落ち着いて、ゆっくりと語に合います。」「なびきりな時は、この限ではなびきりです。」

26

秋と冬のあわれなるもの

P. 120・121

解答

- (1) エ
(2) ア
(3) ウ
(4) イ

(1) 「かつ」は、ここでは「一方では」という意味。「AかつB」のA・Bにあたる内容を、傍線部の前も含めて読み取る。「筆にまかせつつ」書く一方で、「破りすつべきもの」だと言っている。「書くそばから破り捨てるはずのもの」という意味である。作者は、思ったことを言わないと腹がふくれる思いがするので、言い古されているにもかかわらず、思ったことを書き留めるが、すぐに破り捨てるつもりなので、人の見るものではないと言っているのである。したがって、エが正解。

(2) ↓ P. 121 出る問 ポイントを見よう！

(3) 前に強意の係助詞「こそ」があることに注意。結びの活用形は終止形にならない。また、ここは、秋に劣らない「冬枯れのけしき」について述べている部分なので、「をかし」などの語が入るとわかる。よってウが正解。

(4) A 第三段落冒頭の文に「冬枯れのけしきこそ、秋にはをさをさおとるまじけれ」とあることに注目する。B「すさまじきものにして、見る人もなき」(「興ざめなものとして見る人もい

いことだ。三年目には、見事な竹になるのに」と申されたところ、みんなが聞いて「これはおっしゃる通りに惜しいことだ」とおっしゃった。別のそばにいた人が言うには、「だいたいにおいて松茸なども、惜しげもなく食べるのは無用のことだ。二三年もおいたら、大木になるだろう」と申された。

27

若い人に見習わせたこと

P. 122・123

解答

- (1) きりまわしつ
(2) 障子の破れを張り替えること。
(3) イ
(4) ウ
(5) 例物はつわわてゐるところだけを、修理して用いるものだとつづつ。

(2) 「さやうの事」とは、「そのようなこと」という意味。障子が障子の破れを張り替えているところを見て、兄の義影が言った言葉なので、「障子の破れを張り替えること」を指している。

(3) 長い一文の中で主語が変わっている、文脈をたどりながら順に主語をおさえよう。

障子：明かり障子の破れた所だけを張っている↓兄の義影：「なんとかという(召使いの)男に張らせましよう」と言う↓障子：「その男(の細工)が私の細工より優れていることはな

いでしょう」と言って、なほ(「やはり」)一区切りずつ「張られる」、となるので、傍線部の主語は「障子」である。

(4) 「破ればかりを、小刀して切りまはしつづ」(「破れた所だけを小刀であちらこち切つて」張るのが障子のやり方。これに

ない)とされている月が寒々とさえわたる空を、作者は「心ばそぎもの」だとしている。

【現代語訳】

七夕を祭るのは(とても)優雅なものである。しだいに夜が寒くなる。雁が鳴いて来る。萩の下葉が色づく。早稲田刈り干す。など、いろいろなことが一度に行われるのは秋に多いものだ。また、野分の翌朝はとても趣深いものだ。

言い続ける、どれもみな「源氏物語」や「枕草子」などに言い古されてしまっているのだが、同じことを、また、改めては言わないようにしようと思っているわけでもない。思ったことを言わないのは、腹がふくれる思いのするところであるから、筆に任せながら(書いた)つまらない慰みごとであって、書いたそばから破り捨てるはずのものだから、他人が見るほどのものではない。

さて冬枯れの様子は、秋にはほとんど劣るまい。水ぎわの草に紅葉が散りかかって、霜がたいそう白く降りている朝、遣り水から水蒸気が立つのは(とても)趣深い。年が暮れはてて、だれもがせわしげにしているころは、このうえなく風情がある。興ざめなものとして、見る人もない(冬の)月が寒々とさえわたる二十日過ぎの空は、もの寂しい感じ(て趣があるもの)だ。

出る問 類題

解答 (1) イ

(1) 「…人の申されしは」は、「人が申されたことには」と訳すことができるので、主語を表す「の」である。イの「雪の降りたる」は「雪が降った」と訳すことができるので、これが主語を表す。ほかはすべて連体修飾語を作る「の」である。

【現代語訳】

物事ひとつひとつに気がつく人が申されたことには、「当代、禁令がないからといって、竹の子を根から掘ってたくさんもてあますことは、惜し

対して義影は、「皆を張りかへ候はん」(「一度に全部張り替える」)ほうがはるかに容易だと言ったのである。したがって、ウが正解。

(5) ↓ P. 123 出る問 ポイントを見よう！

【現代語訳】

相模守時頼の母は、松下障子と申し上げた。相模守をお招きなさるころがあった時に、障子が自ら、明かり障子の破れているところだけを、小刀であちらこち切つてお張りになっていた、兄の義影が、その日の世話をしていたが、「そのお仕事は(こちらに)いたっていて、なんとか(召使いの)男に張らせましよう。そのようなことに心得がある者でございませう。と申されたところ、(障子が)その男(の細工)が、(「私の)細工よりまさか優れている(とは)いいますまい。」「と云って、やはり一区切りずつお張りになったのを(見て、)義影が、「一度に全部を張り替えますほうが、はるかに簡単でございませう。(古い紙と新しい紙が)まだらになっていきますのも見苦しくありませんか。」「と、重ねて申されたところ、(障子は)「私も、あてさつぱりと張り替えようと思っけれども、今日だけは、わざと、このようにしておくのがよいのです。物は壊れているところだけを修繕して用いるものだ、若い人(「時頼」に見習わせて気づかせようとするためです。と申されたのは、たいそう立派であった。

出る問 類題
解答 (1) 例橋を袖に入れて持ち帰ろうとした行動。(18字)

(1) 陸績の「幼き人に似あはぬ」(「幼い人には似合わない」)行動とはどういう行動かと考えて前の部分から探す。「これ(「橋」)を三つ取りて、袖に入れて帰る」とあるので、この部分を現代語に直し、文末を「行動。」として書くことよ。

【現代語訳】

陸績が、六歳の時、袁術という人の所へ行きました。袁術は、陸績のた

めに、菓子に橋を出した。陸續は、これを三つ取って、袖に入れて帰ろうとし、表術におじぎをしようとして、たもとから落としてしまった。表術は、これを見て、「陸續殿は、幼い人に似合わないこと(をなさる)。」と言いましたところ、「橋が」あまりにみことなので、家に(持って)帰り、母に与えようとしたためです。」と申しました。表術は、これを聞いて、「幼い心で、このような心づかいは、昔も今も珍しいことである。」とほめたそうである。そういうわけで、世の人々は、彼が孝行者であることを知ったそうである。

28

うれしいものは

P. 124・125

解答

- (1) がっかりする
(2) イ
(3) おぼつかなく
(4) エ

- (1) 【現代語訳】が付いているときは、古文と対応させながら読むようにする。古文の「心おとりする」と対応しているのは【現代語訳】の四つ目の文にある「がっかりする」である。
- (2) 文章全体が「うれしきもの」について述べられていることから考える。ここでは、「もののをり、……ほめらるる」(「何かの折によんだ和歌、……ほめられること」)は、「私自身はまだ経験していないことだが、やはり想像できることだよ」と言っているので、イ「そのときのうれしき」が正解。
- (3) 「どんな状態かと気がかりで嘆いていたところ」に対応する古文は「いかにいかにとおぼつかなく嘆くに」。この中の「おぼつかなく」が「気がかりで」の意味である。

出ているような作品については、時代や作者、ジャンルなどをおさえておく。教科書に出てくる作品は、『枕草子』『徒然草』『竹取物語』『おくのほそ道』『平家物語』などである。

【現代語訳】

目新しいと言っていることではないけれど、手紙はやはりすばらしいものである。はるか遠くの国や地方にいる人のことが、たいへん気がかりで、どつしているだろうかと思う時に、手紙を見れば、たった今(その人)と向かい合っているように感じられるのは、とてもすばらしいことであるよ。自分が思うことを(手紙に)書いて送ると、まだ先方まで到着していないであろうが、満ち足りた気持ちができるものだ。

30

孔子が馬を「牛」と言ったわけ

P. 128

解答

- (1) 例孔子が馬を見て牛と言ったこと。
(2) 例牛という文字の縦画が上に突き出ていると牛という文字になる(28字)
(3) ウ
(縦画)は「四画目」などでも可

- (1) 直前に「のたまひければ」(「おっしゃったので」と理由を述べているので、前の「垣より、……のたまひければ」の部分から弟子たちが奇妙だと思った点をとらえる。設問に「どのようなことに對して」とあるので、「……こと。」と答える。
- (2) 直後の、顔回が思ったことが書かれている部分に注目する。顔回は、孔子が「馬が垣根から頭を出していたこと」と「日よみの午といへる文字の、……牛といふ文字に」なることを結びつけたと考えている。
- (3) レ点がついているので、その一字下から上に返って読む。し

- (4) 1〜5のことが【現代語訳】に書かれているかどうかを検討する。3は、「好きな人が……」で始まる文に書かれており、5は、気になる夢を見たときや大切な人の病状が気がかりであるとき、夢占い師や手紙によってその心配事が解決するとうれしいと書かれていることにあてはまる。3・5が正しいので、選択肢としてはエが正解となる。

29

メールもいいけど、やっぱり「文」よ!

P. 126

解答

- (1) aはるかなる世界にある人 b文
cさし向かひたる
(2) エ
(3) A イ B カ

- (1) 「いみじきことなりかし」と作者が思ったことは、「はるかなる……おぼゆる」の部分に書かれている。この部分を問題文と照らし合わせてみると、「遠く離れた地方にいる人」「はるかなる世界にある人」、「手紙」「文」、「対面している」「さし向かひたる」が、それぞれ対応しているとわかる。
- (2) 線②の前の「わが思ふ……行き着かざるらめど」の意味を行間の訳を参考に確認する。「自分の思うことを書いて送ると、まだ先方まで到着していないであろうが」という意味である。この意味に自然に続くものを選択肢から探すと、エが適切。ア・イ前の部分と意味が通らないので誤り。ウ「長い手紙」を書いたとは書かれていないので誤り。
- (3) 高校入試には文学史の問題が出ることもあるので、教科書に

たがって、「2」「1」「3」「5」「4」の順に読むことになる。

【現代語訳】

孔子が、弟子たちを連れて、道を歩いていらつしやると、垣根から、馬が、頭を突き出しているのを見て、「孔子が」「牛だよ」とおっしゃったので、弟子たちは奇妙に思つて、何か理由があるのだらうと思つて、道々、(孔子の)考えを知ろうと思つていたが、顔回という第一の弟子が、一里ほど行つて、理解したように、「十二支の「午」という文字の、頭を突き出して書いたものが、「牛」という文字になるので、みんなの思考力を試そうとおっしゃったのだ」と思つて、(孔子に)お尋ねしたところ、そう、その通り」とお答えになったといつてた。

31

親孝行するのはかゆいもの

P. 130・131

解答

- (1) あらわ
(2) 家貧しく
(3) 3 1 2
(4) エ

- (2) ㊦の「家貧しくして、よろづ心に足らざりけり」(「家が貧しくて、万事思うに任せなかった」)に着目する。「帷帳」さえなかったのも、家が貧しかったからである。

(3) ↓ P. 131 出る問 ポイントを見よう!

- (4) ㊦の冒頭に「呉猛は、八歳にして、孝ある人なり」とあり、そのあと、それを示す具体的なエピソードが書かれているので、エが適切。

【現代語訳】

㊦夏の夜に帷帳がない。蚊が多いが、わざと追い払わない。彼(呉猛)の脂と血を飽きるまで吸わせて、親の部屋に入れさせないようにした。

呉猛は、八歳にして、孝行心のある人である。家は貧しくて、万事思うに任せてなかった。そのため、夏になっても、帷帳もない。呉猛は自分で考えた。自分の着物を脱いで、親に着せ、自分の体は裸になって、蚊に食わせた。蚊も自分の体を食べ、親を見逃さずだろと思つて、そこで、いつも夜とおし裸になり、自分の体を蚊に食わせて、親のほうへ蚊が行かないようにして、(親に)仕えたというのである。幼い者の、このような孝行は、思いがけなかったことである。

出る問 類題

解答 (1) ① ⑥ ② ③ ④ ⑤

(2) 人の為にす

(1) まず、「常」は返り点が付いていないので、一番先に読む。次に「二」のすぐ下の字(「世」)から「一」の付いている字(「定」)まで続けて読んで、「二」の字に返る。書き下し文としては、「常に世間の不定を觀じて」となる。

(2) 「為」にレ点が付いているので、すぐ下の「人」を読んで「為」に返る。送りがなの「ノ」「ニス」をひらがなで書き、「人の為にす」となる。

【現代語訳】

(1) 許田は、若いころからはなやかさを好まなかった。常に世のはかなさを感じて、高い地位を求めず、田畑を耕さなかった。

(2) 昔の学者は自分の(修養の)ために学問をしたが、今の学者は人の(評判の)ために学問をする。

(1) 書き下し文での漢字を読む順番は「人↓従↓学↓者↓有」。

漢文は「人有従学者」となっている。従学者を続けて読んで、「有」に返る返り点が付いているものを選ぶとよい。

(2) 書き下し文と漢文の漢字の順を対応させてみる。書き下し文の通りに漢文を読むには、「不」と「和」の順を入れ替えるとよい。一字下から返って読む返り点はレ点なので、「不」にレ点を付ける。なお、「而」は置き字で読まないため、返り点などは付けない。

【現代語訳】

(1) 董遇に従って学ぼうとする者があっても、董遇は教えることを承諾しないで言うことには、必ず第一に(自分でその書物を)読むことを百回しなさい。

(2) 孔子が言うことには、「人格者は(他人と)調和するがわけもなく賛同しない、思慮分別の足りない人はわけもなく賛同するが(他人と)調和しない。」と。

33

盾と矛を売る商人の口上

P. 134 · 135

解答

(1) いわく

(2) ウ

(3) イ

(4) 盾と矛とをひさぐ者

(5) 陷子之盾何如

(6) 例話のつじつまが合わないこと。

(2) 「これを褒めて」言つた楚人の言葉があとに続き、「我が盾の堅きこと、……」とあるので、「これ」はウ「盾」である。

32

道ばたのすももが苦いわけ

P. 132 · 133

解答

(1) エ

(2) 例子どもたちは競って走っていきすももの実を取つたが、王戎だけは取りに行かなかった(39字)

(3) A 例道ばたにある(6字)

B 例実がたくさんなっている(11字)

(1) ↓ P. 133 出る問 ポイントを見よう!

(2) 指示語が指す内容を答える問題なので、前の部分から「人」が王戎にどんなことを尋ねたのかをとらえる。直前の「諸兒競ひ走りて……唯戎のみ動かず」について尋ねているとわかる。

(3) 古文の「答へて曰はく、」のあとにある王戎の言葉「樹、道辺に在りて……苦李ならん」(「木が、道ばたにあるのに実がたくさんなっている。これは苦いすももにきまつている」)に注目する。行間の訳を参考にして空欄にあてはまる言葉を答える。

【現代語訳】

王戎が、七歳の時、ある日子どもたちと遊び、道ばたのすももの木に、枝も折れんばかりに実がなっているのを見た。子どもたちは競って走っていきこれを取つたが、ただ王戎だけは動かない。ある人がこのことを尋ねると、(王戎が)答えて言うことには、「木が、道ばたにあるのに実がたくさんなっている。これは苦いすももにきまつている。」と。これを取ると本当にその通りだった。

出る問 類題

解答

(1) ウ

(2) 小人同而不和

(3) 「陷さざることなきなり」の「ざる」「なき」は打ち消しの言葉。二重に打ち消しているのので「突き通さないものはない」(「何でも突き通せる」という意味。

(4) 「盾と矛とをひさぐ者」の口上を聞いていた「ある人」が、「子(「あなた」)の矛で……」と言つたことから考える。

(5) 「子之盾」まで読んで「陷」に返るので「一・二点」を用いる。

(6) ↓ P. 135 出る問 ポイントを見よう!

【現代語訳】

楚の国の人に盾と矛を売る者がいた。これ(「盾」)を自慢して言うことには、「私の盾の堅いこといつたら、突き通すことができるものはないのだ。」と。また、その矛を自慢して言うことには、「私の矛の鋭いこといつたら、どんな物でも突き通さないことはないのだ。」と。(それを聞いていた)ある人が言うことには、「あなたの矛で、あなたの盾を突いたらどうなるか。」と。その(盾と矛とを売る)人は答えることができなかったのだ。

出る問 類題

解答

(1) ウ

(2) ア

(1) 生長を助けようと苗を引っ張つた結果、枯れてしまったことから考える。アは「よくすること」が誤り。「助長」は悪い傾向を強くする意味。

(2) 「師」を「藍」や「水」に、「弟子」を「青」や「氷」にたとえている。

【現代語訳】

(1) 宋の国の人に、自分の苗が伸びないのを心配して、苗のしんを引き伸ばす者がいた。疲れきつて帰り、家人に言うことには、「今日は疲れきつてしまった。わたくしは苗の生長を助けて伸ばそうとしたのだ」と。その子が走つていって畑を見ると、苗はもう枯れてしまつていた。

解答

- (1) 万糸を落とす
(2) 三・四
(3) 例雨のしずくが残っている様子。
(4) エ

- (1) 「二」の付いた「落」のすぐ下から「一」の付いた「糸」までの二字「万糸」を続けて読み、「落」に返る。
(2) ↓ P. 137 出る問 ポイントを見よう! 対応する言葉の有無と、返り点に着目する。

- (3) 「ゆうべ」に雨が降ったことに着目する。芍薬の花びらの上の涙のような水滴は前夜の雨のしずくである。
(4) 【通釈】の描写を読み取り、春雷が雨を降らせた翌日の朝の情景を描いていることをとらえる。ア「花びらが舞う」、イ「故郷に帰れる日を待ち望む心情」、ウ「降り続く春の雨」が、それぞれ誤り。

解答

- (1) イ
(2) ア・イ・ウ (順不同)

- (1) 一句が五字(五言)で八句(律詩)からなるので、「五言律詩」。
(2) 一・二句目と、三・四句目、五・六句目がそれぞれ対句になっている。対応する語と返り点を確認しておこう。

【詩の大意】

(私の)国は(戦いで)破壊されたが、山河は(もとのままに)ある。／城(＝長安)は春になり、草木が生い茂っている。／時勢のむくさに心を

35 友を送る夜

痛めては、花を見ても涙がこぼれ／(家族との)別れを恨めしく感じては、鳥の鳴き声にも心が乱れる。／(敵の来襲を知らせる)のうちは三か月にわたってあがり続け／家族の手紙は、多くの財宝にあたるくらい貴重である。／白髪頭は搔けば搔くほど抜け落ちて短くなっている。／(冠を髪に留めようとしても)まったくかんでしが留まらないほどだ。

解答

- (1) 送 郭司倉
(2) ① 郭司倉
② A 明月 B 春潮
③ 例友との別れを惜しむ (9字)

- (1) 漢文「送郭司倉」を、書き下し文では「4 1 2 3」の順に読んでいる。「郭司倉」の三字を読んで上の「送」に返るので、「一・二点」を用いる。

- (2) ↓ P. 139 出る問 ポイントを見よう!

【詩の大意】

門に淮水の緑色が映し出されている。／騎馬に乗る君を引き留めたのも、主人(＝私＝王昌齡)の(別れを惜しむ)心(のため)であった。／明月が立派な役人(＝郭司倉)に付き従ったように見えなくなった時／春の潮のように淮水の流れは夜ごと水かさが増すだろう(私の思いも深まるだろう)。

解答

- (1) A エ B ア

- (1) A 白と赤の対比なので、エ「色彩感」。

- B 「軽快さと、……岸の動き」に合うものは、ア「躍動感」。